

## 計画表出主義と「であるべき」

九州大学 水谷亮介

### はじめに

本稿の目的は、「であるべき (ought to be)」の扱いが困難であるという計画表出主義の抱える難点を指摘すること、そしてその難点を克服するための方法を提案することにある。

メタ倫理的表出主義者の念願の一つは、「べき (ought)」や「よい (good)」などの規範語（ないし評価語）の意味を「心的状態の表出」という観点から説明することである。この念願を達成するためには少なくとも、規範語を用いたとき表出される心的状態はどのような心的状態かということと、意味の合成性はどのように説明されるかということとの二点を、説明しなければならない。だがこれを達成するのは容易ではない。実際、ヘア (Hare 1952) は合成性については未解明な部分を残したし、またブラックバーン (Blackburn 1988) は意味の合成性についての理論は提示しているものの、具体的な規範語の意味については十分に解明していない。

こうした現状において、ギバード (Gibbard 2003) は、「べき」の意味について考察し、上記二点をこれ以上ない仕方で明瞭に説明して見せた。第一点については、計画という心的状態であると特定することによって、第二点については、超計画という概念装置を作り出すことによって、説明して見せたのである。

「計画表出主義 (plan expressivism)」と名づけられるこのギバードの理論は、きわめて画期的かつ説得的なものだった。しかし、理論としての難点は残されている。その難点とは、「すべき (ought to do)」を扱うことは容易でも、「であるべき (ought to be)」を扱うことは非常に困難だということである。すなわちギバードの理論では、「世界は平和であるべきだ」の類の、理想的な状況を述べる場合の「べき」の用法が説明困難である。ギバードの計画表出主義に対してはこれまでにさまざまな問題点がすでに指摘済みであり、それらに対するギバード自身の応答も為されている。ところが、そうした議論のなかで、「であるべき」を巡る問題についてはこれまでに表立って論じられることはなかったように思われる。しかし「であるべき」を巡る問題は、私見では、一見するよりも些末な問題ではなく、むしろきわめて深刻な問題である。

そこで本稿では、まず計画表出主義を概観する (第 1 節)。続いて、「であるべき」の扱いが困難だという計画表出主義の問題点 (およびそれに関連し

た諸問題点)を指摘し、そのうえで「であるべき」を扱うことは、「べき」という語を説明する際の要所であると論ずる(第2節)。それから、形式的道具立てを利用しながら、諸問題の解法を示す(第3節)。最後に、それまでの議論をまとめたうえで、議論の展望を述べる(結語)。

### 1. 計画表出主義の概要

ギバードによれば、一般に文「 $\phi$ 」の意味を説明するには、「 $\phi$ 」と発話したとき表出される心的状態を明らかにすれば十分である。そして文「 $\phi$ 」の発話によって表出される心的状態は、一般に、「 $\phi$ と考える(判断する)」というものである。したがって、文「Xすべきだ」の意味を説明するには、「Xすべきだと考える」という心的状態はどのような心的状態かを説明すれば十分だということになる。ギバードは、「Xすべきだと考える」とは、「Xする計画を持つ」という心的状態にほかならないと考える。それゆえ結局、文「Xすべきだ」を発話することで表出される心的状態は、 $\phi$ する計画だということになる。

計画とは実践的態度(行為を導くような態度)の一種であり、Gibbard(2003)においてはしばしば意思決定とおおよそ同一視されている。計画と意思決定との違いは、複数の行為選択肢がある場合、意思決定するためにはそのなかからただ一つの行為を選ぶのでなければならないが、計画するには複数の選択肢を選択可能なものとして残してよいという点である。たとえば、ある旅人が、AとBの二手に分かれている道に遭遇したとき、どちらの道を行っても同じ距離・同じ時間で目的地に着くという場合には、この旅人はどちらの道を行ってもよいと考えるだろう。この場合、この旅人は、「Aの道に行く」と「Bの道に行く」との両方の選択肢を自らに許可したことになる。あるいはまた、Aの道に行くほうが明らかに目的地への近道だという場合には、旅人は「Aの道に行く」という選択肢のみを許可し、「Bの道に行く」という選択肢は拒否したことだろう。これらいずれの場合においても、旅人はギバードの言う意味で「計画」したと言える。このように、計画するとは、選択可能な行為のなかから、どれを許可しどれを拒否するかを決定することにほかならない。「べき」が意思決定でなく計画に対応しているとギバードが考える理由の一つは、「Xすべきだ」の否定は「Xすべきだというわけではない」すなわち「Xしなくてよい」という許可を表す文だからである。意思決定という心的状態では、許可を表す文の意味が捉えられない。

意味の合成性に関しては、ギバードは「超計画(hyperplan)」という概念装置を考案することで対処している。超計画とは、任意の可能な状況におけ

る任意の行為について、それを許可するか拒否するかのいずれかを定めたものとして定義される。一つの超計画が与えられたとき、その超計画はたとえば「友達を匿っているところへ人殺しがやってきたとき、嘘をつく」という行為を許可するか拒否するかのいずれかであるし、「天正 10 年 6 月 2 日に本能寺に滞在しているとき、自害する」という行為を許可するか拒否するかのいずれかである。

ギバードは、可能世界  $w$  と超計画  $h$  との順序対  $\langle w, h \rangle$  が、可能世界意味論における可能世界と類比的な役割を演ずると考える。 $\langle w, h \rangle$  は、完全に意見を固めた人の心的状態を表している。つまり、すべての平叙文について、それが真か偽かを尋ねれば、必ず真か偽かで答え、「分からない」と答えることはないという心的状態を表している。これは、 $w$  が信念について、 $h$  が計画について、完全に意見を固めた状態を表すと解釈できるからである。このような、完全に意見を固めた人の心的状態を、「超状態 (hyperstate)」とギバードは名づける。

ギバードによれば、文の発話によって表出される心的状態は、超状態の観点から特徴づけることができる。たとえば記述文「地球は丸い」の発話によって表出される心的状態は、地球は丸いという信念であるが、この信念は、文「地球は丸い」にどの超状態が同意でき、どの超状態が同意できないかという観点から特徴づけることができる。つまり、地球は丸いという信念は、 $\{\langle w, h \rangle \mid \langle w, h \rangle \text{ は「地球は丸い」に同意しうる}\} (= \{\langle w, h \rangle \mid \text{可能世界 } w \text{ において「地球が丸い」が真}\})$  という集合として形式化しうるとギバードは考えるのである。これは、命題  $p$  を  $\{w \mid w \text{ において } p \text{ が真}\}$  という可能世界の集合と同一視しうるという可能世界意味論の考え方の応用であると言いうことができる。同様に、「荷造りすべきだ」という文の発話によって表出される心的状態、すなわち荷造りする計画という心的状態は、 $\{\langle w, h \rangle \mid \langle w, h \rangle \text{ は「荷造りすべきだ」に同意しうる}\} (= \{\langle w, h \rangle \mid h \text{ が許可するどの行為も荷造りすることを含意する}\})$  という集合として形式的に表しうる。複合文については、通常の可能世界意味論と同様、ブール演算によってその意味を定義しうる。文「 $\phi$ 」の発話によって表出される心的状態を「 $[\phi]$ 」と書くことにするとすれば、 $[\phi \wedge \psi] = [\phi] \cap [\psi]$ 、 $[\phi \vee \psi] = [\phi] \cup [\psi]$ 、といった具合である。

以上の議論においては、文の意味を特定するには、どの超状態がその文に同意できるかという同意条件が必要でありかつそれで十分である。つまり、ギバードの意味論は次のような同意条件意味論として記述できる。

- 「荷造りすべきだ」に  $\langle w, h \rangle$  が同意しうる  $\Leftrightarrow h$  が許可するどの行為も荷造りすることを含意する。

形式的には、この意味論は、 $\langle w, h \rangle$ を「事実計画世界 (fact-plan world)」という特殊な可能世界であると解釈すれば、一種の可能世界意味論であると解釈することもできる (Gibbard 2003: 57-58)。つまり、次のように真理条件意味論風に記述しても、左辺における「同意」が「真」に置き換わっただけにすぎないため、表現された内容は形式的にはほぼ同等と言ってよい。

- 「荷造りすべきだ」が $\langle w, h \rangle$ で真である  $\Leftrightarrow$   $h$ が許可するどの行為も荷造りすることを含意する。

結局のところ、ギバードの意味論は、形式的な側面だけ見ると、旧来の真理条件意味論から何か大幅に逸脱しているというのではないことになる。むしろギバードの意味論というのは、真理条件意味論の形式的枠組みを表出主義的に解釈する方途を示したものであるとすることができる。ギバードは真理条件意味論を、文に対して指標 $\langle w, h \rangle$ に相対的な真理条件を記述するものではなく、文に対して超状態 $\langle w, h \rangle$ に相対的な同意条件を記述するものとして解釈することにより、表出主義的な意味論を得るのである。

## 2. 計画表出主義の意味論の問題点

こうしたギバードの計画表出主義とそれに基づく形式意味論には、いくつかの不十分な点が残っている。第一は、形式化が十分に為されておらず、そのため合成性が厳密には満たされていない点である。合成的な意味論を作るためには、「荷造りする」の意味論的値と「べき」の意味論的値とから「荷造りすべきだ」の意味論的値を導くというふうになっていなければならない。しかし上の意味論はそうになっていない。

第二は、上の議論では、「荷造りすべきだ」というように、主語のない単純な形式の文しか扱われておらず<sup>(1)</sup>、「べき」の用法のうち多くのものが捨象されてしまっている点である。たとえば、「世界は平和であるべきだ」と言うとき表出される心的状態とはどのようなものか、上の議論だけからは理解できない。計画という心的状態は、行為に対する態度であって、命題に対する態度ではない。したがって、命題に対して「べき」が付された「……であるべきだ」の形の文は、どれもギバードの理論では扱えないことになる。三人称主語の文についても同様である。計画は、発話者自身を取りうる行為に対する態度であるから、「ホームズは荷造りすべきだ」のような三人称主語のベキ文<sup>(2)</sup>については扱いが困難なのである。

「であるべき」の問題についてはギバードは考察していないが、三人称主語のベキ文の問題については、ギバード自身がすでに解決に取り組んでいる。ギバードは、三人称主語のベキ文は、仮想的計画 (contingency plan) を表

出するのだと考えた。仮想的計画とは要するに条件付きの計画のことであり、「状況 C が成り立っているとき X する」のような形式を持つ。たとえば「天正 10 年 6 月 2 日に本能寺に滞在しているとき、自害する」というのは一つの仮想的計画である。三人称主語のベキ文はこうした仮想的計画によって分析できるというのがギバードの考えである。たとえば「ホームズは荷造りすべきだ」の発話によって表出される心的状態は、「もし自分がホームズであるなら荷造りする」という計画であるとギバードは分析する。確かにこれなら、三人称主語のベキ文の意味を、自分自身が持つ計画の表出として理解できる。

しかし、このギバードのアイディアには欠点がある。次の例を考えよう。「お前の物は俺の物、俺の物は俺の物」とつねづね考えているジャイアンという自己中心的な人物がいたとする。新品のプラモデルを手に入れたのび太という人物に対し、ジャイアンは「のび太はプラモデルをジャイアンに譲るべきだ」と主張した。このとき、ジャイアンの表出した計画は「もし自分がのび太なら、プラモデルをジャイアンに譲る」という計画だろうか。ジャイアンは本当にそのような計画を持っていたらだろうか。違いうだろう。ジャイアンは自己中心的な人物であるから、もし自らがのび太であっても、なお「俺の物は俺の物」だと考えたはずである。したがって、自らがのび太であるときにも、やはり他者にプラモデルは譲る必要はないし、むしろ他者であるジャイアンのほうこそそのび太（すなわち俺）にさまざまな物を譲って然るべきだとさえ考えたはずである。このように、「行為者 i は X すべきだ」の形の文に対応する心的状態を、「もし自分が i なら X する」という計画だと見做す考え方には無理がある。

ところで、「であるべき」の扱いが困難であるというギバード的表出主義の欠点は、一見するよりもはるかに深刻な問題である。言語学における標準理論であるクラッツァーの意味論では、「べき」には「であるべき」の用法しかないと考えられているからである (Kratzer 1981)。どういうことかというところ、クラッツァーによれば、「べき (ought)」は統語論的には繰り上げ動詞、すなわち意味論的には命題に対する一項演算子と解される。したがって「i は X すべきだ (i ought to X)」は「i が X するというふうであるべきだ (it ought to be that i Xs)」と同義だとして分析されるのである。形式的には、次のような仕方で「べき」の意味が分析される<sup>(3)</sup>。

$$\bullet \quad \llbracket O\varphi \rrbracket^{<w,f,g>} = 1 \Leftrightarrow \forall v \in \text{Best}(w,f,g): \llbracket \varphi \rrbracket^{<v,f,g>} = 1$$

f と g とは文脈から値が供給されるパラメータであり、これに基づいて最

善世界の集合「Best(w,f,g)」が決定される。この意味論は直観的には、どの最善世界においても「 $\phi$ 」が真であるとき（かつそのときに限り）、「 $O\phi$ 」は真であるという分析を提示している。

これは、計画表出主義にとっては不利な証拠である。計画は、行為に対する態度であって、命題に対する態度ではない。それにもかかわらず「べき」が一様に「であるべき」に還元されて分析されるのであれば、そもそも「べき」という語が計画を表出する語であるのか疑わしく思われてくる。「であるべき」の扱いが困難であるという問題が、計画表出主義にとって深刻であると言ったのはこのためである。

ここですぐ思いつく解決策の一つとして、「……であるべきだ」は「われわれは……をもたらすべきだ」と同義だと考えたらどうだろうか。この考え方だと確かに「であるべき」を「すべき」へと還元することができている。だがこの考え方はうまくいかない。「われわれは……をもたらすべきだ」の発話によって表出される心的状態が何であるかが、再び問題として浮上するからである。ギバードの三人称主語の取り扱いを流用するならば、その心的状態とは、「もし自分がわれわれならば、……をもたらす」という計画だということになる。しかし、「もし自分がわれわれならば」という条件が一体どのような条件なのか、理解することは難しいだろう。

### 3. 問題の解法

合成性の問題から着手することにしよう。形式的な意味論において、「すべき」を「であるべき」に還元せずに扱うにはどうすればよいか。ホーティは、「 $i$ はXすべきだ」を「 $i$ がXするというふうであるべきだ」に還元することはできないと考え、「すべき」に相当する二項演算子「 $O[_\text{stit}: ]$ 」を導入した論理体系を提案している（Horty 1996）。この二項演算子は、行為者  $i$  と命題  $\phi$  とを項として取って「 $O[i \text{ stit}: \phi]$ 」という論理式を形成するものである。「 $O[i \text{ stit}: \phi]$ 」の直観的な意味は、「 $i$ が $\phi$ ということをもたらすべきだ」というものである。

われわれも「すべき」の論理形式として「 $O[i \text{ stit}: \phi]$ 」を採用し、これに対して計画表出主義的に意味を与えることを試みたい。そのためにはギバードの理論のなかで中心的な概念装置であった「超計画  $h$ 」というものをどのように形式化するかを考える必要がある。ギバードは超計画の形式化を十全には行っていないものの、ある程度は行なっている。ギバードは次のように述べる。

行為の機会——選択肢が開かれているような想像可能な状況——は、意思決定しなければならない行為者に「中心化」されている。一つの可能世界——物事がそうあったかもしれない一つの明確な仕方——は、多くの行為の機会を含みうる。というのも、可能世界は多くの行為者を含み、それぞれの行為者は何度も意思決定しなければならないからである。行為の機会は、順序三つ組  $\langle w, i, t \rangle$  によって与えられるものと見做してよいだろう。ただし、 $w$  は可能世界、 $i$  は行為者、 $t$  は行為者  $i$  が世界  $w$  で意思決定すべきものをもっているような時点であるとする。(Gibbard 2003: 57)

状況  $s$  とは  $\langle w, i, t \rangle$  にほかならない。ただし  $w$  は可能世界、 $i$  は  $w$  におけるある行為者、 $t$  は  $w$  における  $i$  が何をするかを選択するある時点であるとする。各々の状況  $s$  に対して、選択肢の集合  $a(s)$  が存在する。これら選択肢は、世界  $w$  における時点  $t$  での行為者  $i$  にとって開かれている、極大に具体的な行為である。超計画  $h$  は、各々の状況  $s$  に対して選択肢の集合  $a(s)$  の空でない部分集合  $h(s)$  を割り当てる。<sup>(4)</sup> (Gibbard 2003: 100)

つまりギバードによれば、超計画  $h$  は、状況  $\langle w, i, t \rangle$  を与えると選択肢（極大に具体的な行為）の空でない集合を返す写像として形式的に表現することができる。

残る問題は、選択肢というものをどう形式化するかであるが、ギバードはこれに関しては特に言及していない。そこでここでは、選択肢  $o$  は状況  $\langle w, i, t \rangle$  の集合として形式化することにしよう。一般に、命題  $p$  の内容は  $p$  が真である世界の集合と同一視しうるが、これと同様に、選択肢  $o$  の内容は  $o$  が選ばれる状況の集合と同一視しうる、と考えるのである<sup>(5)</sup>。

以下、簡単化のため時間  $t$  については考慮に入れないこととし(すなわち、各行為者は各世界においてただ一度きり行為選択を行なうものとし)、状況  $s$  は可能世界  $w$  と行為者  $i$  との順序対  $\langle w, i \rangle$  と同一視することにする。すべての可能世界の集合を  $W$ 、すべての行為者の集合を  $I$  とする。超計画  $h$  は、 $W \times I \rightarrow 2^{W \times I}$  なる写像と定義する。直観的には、 $h(w, i)$  は、 $h$  が  $\langle w, i \rangle$  において許可する選択肢の集合を表す。また、写像  $\text{Choice}$  も  $W \times I \rightarrow 2^{W \times I}$  なる写像とする(ただし、つねに  $\langle w, i \rangle \in \text{Choice}(w, i)$  を満たすものとする)。 $\text{Choice}(w, i)$  は、直観的には、 $w$  において  $i$  が実際に選択する選択肢を表す。以上の道具立てを用いれば、次のように意味を記述することができるだろう<sup>(6)</sup>。

- $\llbracket O[i \text{ stit: } \varphi] \rrbracket^{\langle w, h \rangle} = 1 \Leftrightarrow \forall o \in h(w, i): \forall v \in W: \langle v, i \rangle \in o \text{ ならば } \llbracket [i \text{ stit: } \varphi] \rrbracket^{\langle v, h \rangle} = 1$

(「 $i$ が $\phi$ ということをもたらしすべきだ」に $\langle w, h \rangle$ が同意しうる  $\Leftrightarrow h$ によって許可されたどの選択肢についても、その選択肢が選択されたことを信じるどの超状態 $\langle v, h \rangle$ も「 $i$ が $\phi$ をもたらす」に同意しうる。)

- $[[i \text{ stit: } \phi]]^{\langle w, h \rangle} = 1 \Leftrightarrow \forall v \in W: \langle v, i \rangle \in \text{Choice}(w, i) \text{ ならば } [[\phi]]^{\langle v, h \rangle} = 1$   
(「 $i$ が $\phi$ をもたらす」に $\langle w, h \rangle$ が同意しうる  $\Leftrightarrow w$ における $i$ の選択によって「 $\phi$ 」に $\langle w, h \rangle$ が同意しうるものが必然的となった。)

以上で、合成性の問題については一応の解決を見たことになる。上の意味論では「 $O[i \text{ stit: } \phi]$ 」の意味論的値を、その要素の意味論的値を用いて導出しえているからである。

では、三人称主語のベキ文の問題と、「であるべき」の問題は、どのように解決されうるだろうか。前者から考えよう。上で提示したモデルにおいて、超計画 $h$ によって許可される選択肢（すなわち $h(w, i)$ に属する要素）は、行為者 $i$ が持つ選択肢である。三人称主語のベキ文を意味解釈する際には、 $h(w, i)$ に属する選択肢は、どれも発話者自身の持つ選択肢ではなく、第三者の持つ選択肢であることになる。このことを直観的に理解するならば、三人称主語のベキ文の発話によって表出される心的状態は、やはり仮想的計画であることになる。ただしそれは、「もし自分が $i$ だったら」という仮想なのではなく、むしろ「もし自分が $i$ の行為選択肢を $i$ に代わって選択できるのならば」という仮想であると理解すべきだろう。なぜならば、 $h(w, i)$ におけるパラメータ $i$ の変動は、単に選択肢の集合を変化させるにすぎず、計画を持つ発話者自身がどうであるかは無関係だからである。この考え方で行くと、具体的にはたとえば、文「政府はオリンピックを中止にすべきだ」の発話によって表出される心的状態は、「もし自分が政府に代わって政府の持つ行為選択肢を選択できるならば、オリンピックを中止にする」という計画であることになる。

この考え方は、上述のジャイアン事例という反例を回避することができる点で、ギバードの元の考え方よりも優れている。ジャイアンの発言「のび太はプラモデルをジャイアンに譲るべきだ」によって表出される心的状態は、「もしのび太の行為選択肢をのび太に代わって選択できるならば、プラモデルをジャイアンに譲る」という計画である。この計画を自己中心的人物が持つことは不合理ではない。この場合、自分がのび太である仮想的状況を想定しているわけではないので、ジャイアン事例は反例とならないのである<sup>(7)</sup>。

「であるべき」についてはどう考えればよいか。私の考えでは、「 $\phi$ であるべきだ」の発話によって表出される心的状態は、「もし現実世界がどの可能世



界なのかを選択できるのならば、 $\phi$ をもたらず選択を取る」という計画である。この考えは、直観に適うだけでなく、形式的な側面を見ても説得力があるように思われる。

いま、 $h(w,i)$ に属する選択肢がすべて $\{<w,i>\}$ の形の単集合であったとし、また  $\text{Choice}(w,i)=\{<w,i>\}$ であったとする。このとき、「 $O[i \text{ stit: } \phi]$ 」の同意条件は次のようになる。

$$\bullet \quad \llbracket O[i \text{ stit: } \phi] \rrbracket^{<w,h>} = 1 \Leftrightarrow \forall \{<v,i>\} \in h(w,i): \llbracket \phi \rrbracket^{<v,h>} = 1$$

この同意条件は、以下に再掲するクラッツァー意味論の「 $O\phi$ 」の真理条件と、ほぼ同じ形式をしている。つまり、可能世界の集合に対する全称量化を表すという点で構造が同じである。

$$\bullet \quad \llbracket O\phi \rrbracket^{<w,f,g>} = 1 \Leftrightarrow \forall v \in \text{Best}(w,f,g): \llbracket \phi \rrbracket^{<v,f,g>} = 1$$

$h(w,i)$ に属する選択肢がすべて $\{<w,i>\}$ の形の単集合であり、また  $\text{Choice}(w,i)=\{<w,i>\}$ であるような場合とは、要するに、行為者  $i$  は現実をどの可能世界にするかを直接選択できるような行為者だということである。そのような行為者  $i$  は、いわば神のような存在であると言ってもよいかもしれない。以上の考察から、「 $\phi$ であるべきだ」の発話によって表出される心的状態は、「もし自分が神の持つ選択肢を神に代わって選択できるのならば、 $\phi$ をもたらず選択を取る」という計画、言い換えれば「もし現実世界がどの可能世界なのかを選択できるのならば、 $\phi$ をもたらず選択を取る」という計画であると考えることができる。

## 結語

本稿は、「であるべき」の扱いが困難だという計画表出主義の問題点を中心に議論してきた。本稿におけるこの問題の解決策は、「であるべき」を特殊な仮想的計画を表出する語として解釈するというものだった。本稿ではこのことを、形式的道具立てを利用しながら論じた。

以上の議論は、単に計画表出主義の欠点を克服するだけにとどまらない射程を持っている。すなわち、この議論は、規範の哲学にとっての基礎となりうるのである。

シュローダーは、「すべき」を「であるべき」に還元するクラッツァー的な発想を批判し、「すべき」には「であるべき」に還元できない独自の意味・用

法があると主張している<sup>(8)</sup> (Schroeder 2011)。シュローダーによれば、ベキ文はしばしば「であるべき」と「すべき」という二種類の解釈を許す。シュローダー自身の挙げる例文は「ラリーが宝くじを当てるべきだ (Larry ought to win the lottery)」という文である。この文は二種類の仕方で読める。一つの読みは、ラリーに対して「宝くじを当てよ」と助言するような読み（「すべき」の読み）であり、もう一つの読みは、「ラリーが宝くじを当てる、というふうであるべきだ」という、理想的状況を記述する読み（「であるべき」の読み）である。これら二つの読みが異なる意味を持つことは、次のように考えれば分かる。前者の読みでは、偶然に委ねられるはずの宝くじについて「当てなさい」と助言する文だということになるので、真か偽かと言えばおそらくは偽であると判断することになる。後者の読みでは、状況次第では（たとえば、ラリーは何をやってもうまくいかず不運続きで落ち込んでおり、お金にも困っているが、あいにくの不況で無職である、といった状況下では）、真であると判断できる。二つの読みでは真理条件が異なり、したがってその意味するところも異なることになる。このように、「であるべき」と「すべき」とでは、一般にはその意味が異なっていると考えられる。

シュローダーによれば、「すべき」は「であるべき」とは違って、次の諸性質を持つ。

1. 「すべき」は助言に直接的に関係している。
2. 「すべき」は熟慮 (deliberation) を終わらせるのにふさわしい語だ。
3. 誰かが何かを為すべきであるとき、その者がそれを為さなかったならば、その責任はその者にある。
4. 「すべき」は「できる」を含意する。ただしこの「できる」は、形而上学的可能性ではなく、能力を意味する「できる」である。
5. 「すべき」は、「であるべき」に比べて、義務という概念とより緊密に関連している。

なぜ「すべき」は、「であるべき」と違ってこれらの特徴を持っているのだろうか。その理由は計画表出主義の観点から明らかにできるように思われる。「すべき」は発話者自身や他者や集団の現実の行為選択に関する計画を表出する語であるのに対し、「であるべき」は「もし現実世界がどの可能世界なのかを選択できるのならば」という現実には限りなく実行不可能に近い仮想的計画を表出する語である。この違いが、「すべき」と「であるべき」を異なるものにしている。「であるべき」は実行不可能に近いという点できわめて特殊

な仮想的計画を表出する語であるため、助言や熟慮、義務、責任、行為の実行可能性といった事柄とは無縁なのである。

以上は予備的な考察にすぎず、「すべき」の特質についてや、義務・責任などの倫理的諸概念と「すべき」との関係について、未解明な部分はなお多い。しかしいずれにせよ、本稿の議論は、単にギバード的表出主義の細部の改良であるにとどまらず、規範の哲学にとっての基礎的考察となりうることは、確認しえたのではないかと思われる。

## 注

(1) むろんギバードは「荷造りすべきだ」という日本語文について考察したのではない。正確な事情を書くならば、ギバードは議論の単純化のために、「べき (ought)」の意味について直接考察するのではなく、「唯一のすることだ (the thing to do)」という人工的な述語を導入し、まずこれについて考察するという方法を取っている。すなわちギバードは、「I ought to pack」の代わりに、「Packing is the thing to do」という文を考察の取り掛かりとしている。ギバードもまた、本稿で述べたように、行為の動作主が明示的でない文についてまず最初に考察しているのであり、やはりその議論は「べき」の用法のうち多くのものを捨象したうえでの議論になっている。

(2) 以下、「べき (ought)」を含む文を「べき文 (ought sentence)」と呼ぶことにする。

(3) 「 $O\phi$ 」は、文「It ought to be that  $\phi$ 」の論理形式を表すものとする。また  $\square$  は付値関数とする。なお、本文中に掲げる「 $O\phi$ 」の真理条件は、Carr (2017) に倣い、やや簡略的に記述している。

(4) 引用文中の記法は適宜、本稿の記法に合わせて修正している。

(5) 同様の発想は、Horty (1996)、Yalcin (2022) でも見られる。

(6) 形式化の仕方は Horty (1996) に多くを負っている。

(7) シュローダーの用語では、「すべき」／「であるべき」ではなく、「熟慮的べき (deliberative ought)」／「評価的べき (evaluative ought)」である。この用語の違いについては、本稿の議論にはそれほど影響しないと思われるため、本稿では詳述しないでおく。

## 文献表

Blackburn, Simon, 1988, "Attitudes and Contents", *Ethics* 98 (3), 501-517.  
Carr, Jennifer, 2017, "Deontic Modals", in Tristram McPherson & David Plunkett (eds.), *The Routledge Handbook of Metaethics*, Routledge, 194-

210.

Chrisman, Matthew, 2016, “Metanormative Theory and the Meaning of Deontic Modals”, in Nate Charlow & Matthew Chrisman (eds.), *Deontic Modality*, New York: Oxford University Press, 395-424.

Gibbard, Allan, 2003, *Thinking How to Live*. Harvard University Press.

Hare, Richard Mervyn, 1952, *The Language of Morals*, Oxford, England: Oxford University Press.

Horty, John F., 1996, “Agency and Obligation”, *Synthese* 108 (2), 269-307.

Schroeder, Mark, 2011, “Ought, Agents, and Actions”, *Philosophical Review* 120 (1), 1-41.

Kratzer, Angelika, 1981, “The Notional Category of Modality”, *Words, Worlds, and Contexts: New Approaches in World Semantics*, Berlin: de Gruyter, 38-74.

Yalcin, Seth, 2022, “Modeling with Hyperplans”, in B. Dunaway and D. Plunkett (eds.), *Meaning, Decision, and Norms: Themes from the Work of Allan Gibbard*, Maize Books, 271-303.